

中日評論

わが国をとりま
く国際環境がいよ
いよ高くなつて
きたところで、衝
撃的な出来事が相
次いだ一九七〇年
代も、きょうがい

よい最後となつた。新聞雑誌
やテレビ、ラジオでも、七〇年
代の回顧とか八〇年代の展望な
りをひとわりやっていたが、
いずれも中身の薄いものが多か
つた。実際、七〇年代をどのよ
うに定義づけ、これからの八〇
年代をどのように見透(とあ)
すかは、きわめて難しい課題で
ある。それほどまでに今日の時
代は不可測だといえよう。

私自身もこれまで、中国の
将来や国際社会の方向をひそか
に確信をもつて見送ってきた
つもりだが、その中国について
も、あるいは中ソ関係の将来に
ついては、見透しはなかなか難
しくなってきた。そのような
きにくこそ、私たちは、歴史の教
訓を重視すべきではないか。

そこで現代史をふりかえつて
みると、いずれも各年代末に
は、次の年代を規定した重要な
出来事が起こっていることに気
がつく。第二次世界大戦以前に
ついても、一九三九年は独ソ不
可侵条約と第二次世界大戦の勃
発(ぼつ)だ、一九一九年は世界

恐慌、一九一九年は第一次大戦
の終結と中国の五四運動といつ
た具合に潮(さか)のぼれば、こ
れらの年代末がいかに重要な歴
史の転換点であったかが一目瞭
然(りやうぜん)然(ぜん)する。しかし、
ここでは戦前のことばさお
いて、戦後史を考(か)えてみよう。
まず一九四〇年代末、それは
四九年のヨーロッパにおけるN
ATO(北大西洋条約機構)の
成立、アジアにおける中華人民
共和国の出現に見られるよう
に、戦後世界秩序を揺動(ゆどう)したヤ
ルタ・ポツダム体制(ポツダム体制)采(さい)英(えい)ソ(そ)の
戦勝(せんしょう)三大国による世界支配体
制(せい)がいちばやく解体(かい)しはじ
め、同時に資本主義世界体制と
社会主義世界体制の対立が激化
したことを物語(ものがたり)した。こう
して中ソ友好同盟条約(こうどうどうめいじょうやく)と朝鮮戦
争(せんそう)に始まる一九五〇年代は、東
西冷戦(れいせん)の時代となつたが、この
やれも規定したのである。

きく移行し、こうした開眼(かいがん)を疑
って台頭したドゴールのフラン
スは、経済復興を遂げた西独と
ともにEECを形成してヨーロ
ッパの復興をばかろうとして。こ
つまり、五八、五九年起こつ
た出来事は、国際政治の多極化
時代としての一九六〇年代をは
やくも規定したのである。

それからさらに十年、六〇年
代末には何が起こつたか、六八
年のジョンソン米大統領による
ベトナム北爆(きたく)炸(ばく)弾(だん)止(し)声明(せつめい)は六九
年のニクソン米大統領によるグ
ラ

偶然といえぬ転換点

現代史と年代末

中嶋 嶺雄



声明(せつめい)であつた。つまり、いまか
ら十年前の一九六九年には、米
ソ中日の四大国が期せずして新
しい動きを刻んだことによ
り、次の七〇年代は大開(たいかい)のバ
ワー・ゲームの時代となつたの
であつた。

石油危機によって気付かされ
た人類の生存の将来への不安
が、こうしたパワー・ゲームを
激(げき)化(か)させたとはいふまでもな
い。

そして、七〇年代末、つまり
十年開(かい)で現代史の転換(てんげん)がいず
れも年代末に生じていること
は、もはやたんなる偶然(ぐぜん)とはい
えないであらう。十年という時
間は、新しい国際環境が形成さ
れ、やがてそこに問題が生じて
変化(へんか)しないは破局(はくきょく)を迎(むか)えるまで
に要(を)する「時間(じかん)的成熟(てきじゅつ)」の期間
として必要(ひつや)十分な条件(じょうけん)なのであ
らう。

九全大会によって文化大革命を
一応(いちおう)收拾(しじふ)した中国は、外部世界
に再び対応する余裕(よゆう)をもちほ
めたが、そのような中国を封じ
込めるためにこそ、ソ連は六九
年に「アジア集団安保(あじあしゅうたいんあんぽ)」構想(こうさう)を
打ち出し、中国はこれを「覇権
級(きゅう)会議(かいぎ)の進行(しんこう)、イランをほじめ
とする中東情勢(ちゆうとうじょうせい)の流動化(りゆうどうか)とテフ
ガニスタンからベトナム、ラオ
スにまで広がる「ソ連の影(かげ)」、
朴(パク)大統領(たいりょう)暗殺(あんころ)以後(いご)の不安(ふあん)朝鮮(ちょうせん)
半島情勢(はんとうじょうせい)、第二次中越戦争(だいにちちゆうせんせん)の危
機(き)と難民(なんじん)流出(りゅうしゅつ)がなつてくるとい
はるまじ。

(東京外情大戦後)